様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ５ 月 ２９ 日現在

機関番号：１２６０１
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2010～2014
課題番号：２２５２００７６

研究課題名（和文）シーア派・スンナ派間の宗派論争に関する思想史的研究

研究課題名（英文）Research on the Shi`a-Sunni Disputes from the Viewpoint of the History of Thought

研究代表者
菊地　達也（Kikuchi, Tatsuya）

東京大学・人文社会系研究科・准教授

研究者番号：４０３８３３８５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,600,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は思想史的な観点から、シーア派とスンナ派の対立が頂点に達した10世紀以降、両派の他者認識がいかに変遷していったのかを分析し、両派の関係に関する正しい理解を一般に提供することを目指した。
研究の結果、10世紀のイスマーイール派によるファーティマ朝樹立以降、スンナ派との対立は激化したものの、同朝の衰退とアッバース朝の滅亡の結果、シーア派主流派とスンナ派は思想的に接近していったこと、その一方、シーア派内極端派とスンナ派内保守派の間では他者否定の思想が純化していったことが判明した。

研究成果の概要（英文）：In this research project, I analyzed how the Shi`a-Sunni perceptions of each other had been changing since the 10th century, when the conflict of the two sects reached the apex, in order to provide a correct understanding about their historical relations.
As the results of my research, it turns out that the mainstream of the Shi`ite, namely the Twelver Shi`is and the Ismailis, and the Sunnis got close to each other owing to the decline of the Ismaili Fatimids and the collapse of the Abbasids, although the establishment of the former dynasty had brought a serious friction between them. Meanwhile the small groups of radical Shi`is and the conservative Sunni thinkers purified their thoughts that deny the existence of the other sect.

研究分野：シーア派思想史

キーワード：シーア派　イスマーイール派　ドゥルーズ派　アラウィー派　ファーティマ朝　スンナ派　イブン・タイミーヤ

１．　　研究開始当初の背景

2003 年のイラク戦争後の混乱が主な原因となって、イスラーム教には「宗派抗争」のイメージがつきまとうようになった。だが、イラクにおいて対立しているとされるスンナ派とシーア派は、必ずしも宗教問題をめぐって衝突しているわけではないし、宗教上の問題が衝突の火種となる場合であっても、その対立の背景となる思想が十分に理解されているわけでもない。

２．研究の目的

本研究は思想史的な観点から、909 年のファーティマ朝樹立によりシーア派（主にイスマーイール派）とアッバース朝支持のスンナ派の対立が頂点に達した 10～11 世紀を経て、12～13 世紀の両王朝の滅亡により宗派間の緊張が弛緩し、両派が共存するに至る過程を分析することを目指した。このような分析により、両派の関係に関する正しい理解を一般に提供することも目的の一つであった。

３．研究の方法

本研究においては、シーア派とスンナ派の対立がもっとも激化したファーティマ朝・アッバース朝期（10～11 世紀）の両派の論駁書において敵対する宗派がいかに描かれたのかをまずは分析し、他者否定の論理がいかに変遷したのかを考察した。雑誌論文および①図書①は、ファーティマ朝最盛期、すなわちスンナ派にとってはシーア派の脅威がもっとも深刻だった時代にイスマーイール派思想家が構築した思想とそこに見られる他者観を分析したものである。雑誌論文②および雑誌論文③は、12 世紀末のファーティマ朝滅亡によりシーア派によるイスラーム世界制覇の夢が絶たれ、シーア派に対する脅威が減退した時代にイエメンで書かれたイスマーイール派文献を分析の対象にしている。

王朝を樹立したイスマーイール派や東方世界での民衆布教に成功した十二イマーム派は、政治的、社会的に伸張したことにより、スンナ派との対立が深まる一方で、その思想は穏健化し、むしろスンナ派思想に接近しつつあった。このような傾向に背を向けて、元々のシーア派思想を先鋭化させたのが、イスマーイール派から分派したドゥルーズ派とイスマーイール派、十二イマーム派の影響下で生まれたアラウィー派であった。本研究の第二段階においては、10～13 世紀にシーア派内の主流派とは一線を画した教義と世界観を形成した両派にも注目し、イスマーイール派や十二イマーム派ほど研究が進んでいない両派の思想とそこに見られる他者認識をも分析した。その成果となるものが学会発表①②③④、図書③④であった。

ファーティマ朝イマーム=カリフ政権の滅亡により、シーア派とスンナ派の対立の根幹にあった指導者論をめぐる相違は現実世界においては意味を失った。スンナ派カリフを脅かす存在がいなくなり、主要な争点が無意味化した時代にスンナ派がシーア派をどのように規定したのか、という問題についても本研究は考察をおこなった。サラフィー主義の源流と見なされ、現代に至る反シーア派主義に大きく寄与したイブン・タイミーヤ(1328 年没)のシーア派論をも扱っている研究成果が学会発表②と図書④である。

本研究は、以上のように、宗派間の緊張がもっとも高まった時代の他者認識が時代を経るに従いどのように変化したのか、また思想的にはスンナ派に接近した主流派のシーア派と、小規模であるが思想的には先鋭化した過激シーア派との間にはどのような違いがあったのかを考察することで、他者観の変遷を明らかにすることを目指した。

４．研究成果

ファーティマ朝イマーム=カリフとアッバース朝カリフが覇権を争った時代に、主要な争点である指導者論が両派において整備された。前者においては神話的宇宙論により王朝の歴史的、宇宙論的使命が正統化される一方で（図書①）、イスラーム哲学の理論を取り入れることで指導者論が理性主義的に説明されるようになった。しかし、対立点の先鋭化は同時にそれ以外の領域での接近を生み、哲学化した指導者論と宇宙論は、同じくイスラーム哲学の影響を受けたスンナ派神学と思想的土台を共有することにもなった（雑誌論文①）。

この時期までのスンナ派の他者像については、神学の一部である分派学書を通じて分析をおこなった（学会発表①）。分派学書において宗教上の他者が否定的に扱われている点ではスンナ派もシーア派も変わらないが、他者記述の手法、形式については類似したものになっており、指導者論に見受けられたような対立と近接がここにも見出せた。

その後ファーティマ朝が衰亡し、イスラーム世界の中心部におけるスンナ派の覇権が確定すると、イエメンのイスマーイール派においては哲学的思索が影を潜め、その宇宙創成論は神話化し、敵対する他宗派を宇宙創成論のレベルから悪と断ずる思想が成立することになった（雑誌論文②③）。このように本研究により、10～12 世紀には政治的緊張の高まりが思想的近接を生んだが、その一方で政治的対立が緩和すると思想上の対立が高まるという逆説が起きていたことが分かった（図書③が示す通り、ファーティマ朝滅亡後のシリアにおけるイスマーイール派のようによりスンナ派への接近を強めるケースもあった）。

一方、思想的にスンナ派に接近することになったイスマーイール派、十二イマーム派とは違い、12 世紀以降、特定人物の神格化、輪廻思想といった、スンナ派とは決して相容れない思想を発展させたのがドゥルーズ派と

アラウィー派であった。スンナ派信徒を潜在的な改宗対象と捉える前二派と違い、この両派はスンナ派、シーア派を問わず自分たち以外を宇宙創成以来の根源的な悪と見なした（学会発表③④）。その善悪二元論はイエメン・イスマーイール派と比べてもより徹底したものとなっている（雑誌論文②）。

激しいシーア派攻撃で知られるサラフィー主義者（ISなどを含む）はその思想の多くをイブン・タイミーヤに負っている。アッバース朝滅亡後にモンゴルの時代に生きたイブン・タイミーヤは、シーア派諸派を論駁しているが、懺悔の機会も与えず処刑という過酷な判断を下しているのがドゥルーズ派とアラウィー派であった（学会発表②）。イスラーム世界全体で見るとシーア派とスンナ派の対立はかなりの程度緩和された時代であったが、歴史的シリア地域においては、ドゥルーズ派、アラウィー派、イブン・タイミーヤが極端なまでに他者を否定する論を展開していたのである。

本研究により得られた知見は以下の通りである。

(1) シーア派、スンナ派間における対立には波があり、政治的緊張と宗教理論上の対立は必ずしも連動しなかった。ファーティマ朝期には政治対立に合わせて激しい論争が発生したが、思想的な近接も生み出した。少なくてもシーア派の側は相手を改宗の対象者と考えていたので、他者否定の度合いはそれほど高くなかった。

(2) 他者否定の論理は置かれている状況に大きく依存する。ファーティマ朝滅衰亡後のイスマーイール派を例にとれば、シリアではよりスンナ派思想に接近することになったが、イエメンではファーティマ朝期よりも厳しい主張が生まれた。

(3) 後の時代につながる他者否定の論理は、本来の争点が消失した時期に生まれた。シーア派諸派の中でもっとも厳しく他者を否定したドゥルーズ派、アラウィー派が活動していた歴史的シリアにおいて、現代につながる反シーア派言説がイブン・タイミーヤによって形成された。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　3　件）

①Kikuchi, Tatsuya, “The Philosophical Prophetology of Isma`ilism in the Eleventh Century,” *Orient* 44 (2009), pp.3-17, 査読無し.

②Kikuchi, Tatsuya, “The Resurrection of Isma`ili Myth in Twelfth-Century Yemen,” *Ishraq* 4 (2013), pp. 345-359, 査読無し.

③菊地達也「イスラム教シーア派におけるメシア主義とその神話化」『文化交流研究』第27号、2014年、37-47ページ、査読無し.

〔学会発表〕（計　5　件）

①菊地達也「イスラーム少数派」「基盤研究A グローバル化時代に対応する21世紀型イスラーム学の構築」第2回研究会、2013年10月11日、京都大学（京都府京都市）.

②菊地達也「シーア派思想史と極端派(グラート)」スルタン・カブース・グローバル中東研究寄付講座、2013年10月19日、東京大学駒場キャンパス（東京都目黒区）.

③菊地達也「現代ドゥルーズ派のタキーヤと護教論」「科研A 変革期のイスラーム」2013年度第2回研究会、2014年2月21日、東京国際大学（埼玉県川越市）.

④菊地達也「イスラーム共同体の境界領域：ドゥルーズ派を中心に」「基盤A ユダヤ・イスラーム宗教共同体の起源と特性に関する文明史的研究」研究会、2014年3月18日、立教大学（東京都豊島区）.

⑤菊地達也「イスラーム教徒の文化と戒律」第5回国際診療セミナー、2015年1月20日、東京大学医学部付属病院（東京都文京区）.

〔図書〕（計　4　件）

①菊地達也ほか、竹下政孝・山内志朗(編)『イスラーム哲学とキリスト教中世III：神秘哲学』岩波書店、2012年、全357+26ページ（「イスマーイール派の神話」、67-90ページを担当).

②菊地達也(監修)『イスラムがわかる！』成美堂出版、2013年、全144ページ.

③菊地達也ほか、黒木英充(編)『シリアとレバノンを知るための67章』明石書店、2013年 、全433ページ(「アラウィー派」、122-127ページ、「イスマーイール派」、134-139ページを担当).
④菊地達也ほか、近藤洋平(編)『中東の思想と社会を読み解く』東京大学中東地域研究センター スルタン・カブース・グローバル中東研究講座、2014年、全212ページ（「極端派（グラート）の伝統とアラウィー派」、109-130ページを担当).

〔産業財産権〕
○出願状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
菊地　達也　（KIKUCHI, Tatsuya）

研究者番号：40383385

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：